

2019/05/26

「聖書の読み方」

聖書には何が書かれているのか、どのように読めばよいのか、今日はその基本を押さえておきましょう。まず、聖書は何を目的に書かれたかを知る必要があります。

■聖書が書かれた目的

聖書は「キリスト」を証しするために書かれました。キリストは、私たちに永遠のいのちを与える方であり、その方の贖いを伝えるために書かれました。

「あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ。」(ヨハネ 5:39 新共同訳)

つまり、「キリスト」が本体であって、本体の“影”が聖書ということになります。例えば、旧約聖書には神の律法の教えが多々ありますが、それは「キリスト」の“影”として読まなければ、神の律法の意味を取り違えてしまうのです。それで聖書にはこのように書かれています。

「これらは、次に来るものの影であって、本体はキリストにあるのです。」
(コロサイ 2:17)

「これらは」とは、「神の律法」を指しています。人々は「神の律法」を、この世の律法と同じように捉え、律法の行いができるようになれば神に認められ、神の栄誉が受けられると考えていました。しかし、「神の律法」は、本体であるキリストが十字架で成し遂げられた贖いの“影”でした。それはキリストを信じる信仰で救われるという贖いであって、それを受け取らせるための“影”が「神の律法」でした。つまり、「神の律法」は自らの義を証しさせるために神が与えたものではなく、どうにもならない自分の罪に気づかせ、罪を赦されるキリストに導くためのものだったのです。聖書はそのことをこう教えています。

「こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。」(ガラテヤ 3:24)

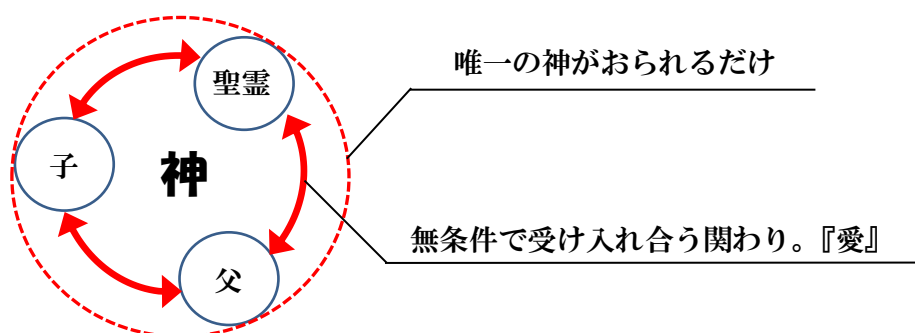
したがって、本体である「キリスト」のことを知らなければ、聖書に書かれていることの意味を知りようがありません。特に旧約聖書の意味は、わけが分からなくなってしまいます。そこに書かれている事柄を理解するには理解するための物差しが必要なのであって、聖書の場合、その物差しが「キリスト」です。そこで、簡単に「キリスト」について押さえておきましょう。

1. 三位一体の神

キリストは三位一体の神です。父と呼ばれる神、御霊と呼ばれる神、それと同じ神であり、この方々は「一つ思い」を共有し、互いが互いを必要とする関係にあつて、互いは「一つ」です。「わたしと父とは一つです」(ヨハネ 10:30)。「御霊はわたしの栄光を現します」(ヨハネ 16:14)。誰が偉く、誰が偉くないという関係ではなく、互いが等しく、互いに支え合う関係です。ゆえに、人の側からすると、神はお一人しかいないとなります。「私たちには、父なる唯一の神がおられるだけで」(I コリント 8:6)。聖書はこうした神の親密さを表現するために、キリストを「子」と言い、御霊を「聖霊」と言ったりするのです。「父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け…」(マタイ 28:19)。

2. 本質は愛

神は三位一体なので、そこには三位の交わりがあります。その交わりは、互いに「一つ思い」を共有する一体の関係にあるので、互いに互いを無条件で受け入れ合うという関わりになります。そうした関わりを「愛」といい、したがって神の本質は「愛」ということになります。「愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです」(I ヨハネ 4:8)。以上のお話を基に、神の互いの関係をイメージすると次のようになります。



3. 永遠であり、変わることはない方

さらに神は、何ものにも制約されない方であり、その方には、過去、現在、未来という制約すらありません。時間の制約はなく、「永遠」です。ゆえに、その神を時間という制約の中で暮らす人の側から見ると、それは「静止」になり、全く変わることはない方となります。つまり、キリストは「永遠」であつて、変わることなく人を贖うという祭司の務めをされます。

「しかし、キリストは永遠に存在されるのであつて、変わることはない祭司の務めを持っておられます。」(ヘブル 7:24)

すなわち、旧約聖書に描かれている神も、新約聖書に描かれている神も、同じ「キリスト」が描かれているのです。三位一体の神が、キリストが十字架で明らかにされた贖いを持って、アダムの時代から人と関わってこられました。神が人に抱いている思いも、対応も、全く変わることはありません。きのうも今日も、これからも同じです。

「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることはない方です。」

(ヘブル 13:8)

聖書は、こうした神を証しするものであり、神はご自分のそうした変わることはない思いを人が誤解しないように、「キリスト」が「イエス」として来られ、その変わらない思いを明らかにされました。そこで今度は、キリストが明かされた人への思いを見てみましょう。

■キリストの思い

聖書は、キリストがどのような思いを抱いて来られたのか、何をしようとして来られたのか、そうした神の「本音」を次のように証ししています。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」

(ヨハネ 3:16)

神の本質は「愛」なので、神は人を愛するために来られました。その愛は、人の現状は滅びるしかない「死人」であったので、人をそこから贖い出し、「永遠のいのち」を持てるようにすることであったと綴られています。つまり、キリストが来られたのは人を裁くためではなく、キリストを通して人が救われるためでした。

「神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。」(ヨハネ 3:17)

よく人は、聖書に書かれている文章を読み、「神は怒る神であり、裁く神である。だから、良い行いができなければ裁かれる…」と誤って思いがちです。しかし、キリストは、私たちにさばかないと仰っておられます。そもそも、人の現状は「死人」なのです。なぜなら、人は生まれながらに神との結びつきのない者であって、そのせいで、「肉体の死」を以て滅ぶしかないからです。「ついに、あなたは土に帰る」(創世記 3:19)。誰もが知っているように、人は「肉体の死」に向かって生きています。それはまるで、死刑を宣告された者が、死刑の執行を待つようなものです。人はすでに裁かれていて、その死刑判決を誰も覆せない中に入っています。そんな状況にある者に対し、一体どんな罪を問うというのか。今さら罪を問うところで全く意味がありません。神がそうした死刑囚に対しできる唯一のことは、裁くことではなく救うことしかないのです。それで、この御言葉の続きにはこうあります。

「御子を信じる者はさばかれぬ。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったため、すでにさばかれている。」(ヨハネ 3:18)

ここに、キリストを信じる者は救われるが、そうでない者は「すでにさばかれています」とあります。それは、信じなければ生まれたときのままであり、それは死刑を宣告されたままであるということです。その死刑宣告は悪魔の仕業によるものであり、悪魔が人を神から引き離し、神の世界と人の世界とを分け、滅びるしかない姿にしました。この事件を、「さばかれています」と言っています。ちなみに「さばかれています」と訳された言葉は「クリノー」[κρίνω]で、本来の意味は「分ける」です。信じない者は、既に分けられた状態にあることを意味しています。

このように、聖書はキリストを証しし、そのキリストは人を裁くためではなく救うために来られたというのが「本音」です。それは、人はアダムが悪魔の仕業で罪を犯して以来、すべての人は死んでしまったからです。「アダムにあってすべての人が死んでいるように」(I コリント 15:22)。神との結びつきを失い、滅びるのを待つだけの「死人」になったから、神の思いは人を裁くことではなく、救うことだけに特化するのです。それでイエスは、私たちのことを「死人」と呼び、こう言われました。「死人が神の子の声を聞く時が来ます」(ヨハネ 5:25)と。ならば、神はどうやって人を救われるのでしょうか。神の救いとは、どんなものなのでしょう。

■キリストの救い

キリストは、人を救うために来られました。そこで、どうすれば救われるのか、そのことも具体的に話されました。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」(ヨハネ 5:25)

「まことに、まことに」ということは、これは神の思いの核になることを表しています。その中でキリストは、「死人が神の子の声を聞く時が来ます」と言われました。どういうことかということ、神は「死人」となった私たちに、呼びかけをされるということです。「この御手に握りなさい！」と、人の「魂」に呼びかけられるということです。それゆえに、その呼びかけに応答するなら救われるのです。そのことを指して、「聞く者は生きるのです」と言われました。実はこの直前で、その救いの中身を具体的に話されています。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」(ヨハネ 5:24)

ここでキリストは、神の呼びかけに応答した者は「永遠のいのち」を持っていて、「死」から「いのち」に移されていると言われたのです。つまり、神の呼びかけに応答した「魂」は、

神との関わりがない「死」の世界から、神と暮らす「神の国」に移されたことを意味します。それでキリストは、別の箇所でも次のようにも言われていました。

「神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。『そら、ここにある』とか、『あそこにある』とか言えるようなものではありません。いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。」(ルカ 17:20-21)

こうしてキリストは、先行して「魂」を「神の国」に移し、その人の「体」が朽ち果てる「終わりの日」が来たなら、今度は「朽ちない体」を着せ、その者を「神の国」に完全に移し替えるのです。これが、キリストの目指す救いでした。

このようにキリストの救いは、「わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです」(ヨハネ 5:24) になります。先行して、「魂」が「神の国」(いのち)に移されるということになります。そうすると、「死」と「いのち」の間には越えられない淵があるので、一旦救われて「いのち」に移された者は、すなわち「永遠のいのち」を持つようになった者は、どんなに努力しても、もう二度と「死」の世界には戻れないのです。つまり、滅ぼされることはないということです。それでキリストは、ご自分が与える救いに関してはこうも言われました。

「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」(ヨハネ 10:28)

このことをパウロは、神の靈感によってこう書いています。

「私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」
(ローマ 8:38-39)

つまり、一旦救われたなら、その救いは永遠であって、取り消されることなど起こり得ないのです。そもそも行いではなく、神の呼びかけに応答して救われた以上、行いによって救いが取り消されるという話にはなりません。

「だれかが、わたしの言うことを聞いてそれを守らなくても、わたしはその人をさばきません。わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからです。」(ヨハネ 12:47)

以上の話から、どんなキリストの姿が見えてくるでしょう。それこそが、聖書を読むときに使わなければならない眼鏡であり、物差しです。

■キリストの眼鏡

聖書は「キリスト」を証しする書です。そのキリストは、人を裁くためではなく救うために来られました。なぜなら、人は死んでいて、そのままだと滅ぶしかなかったからです。そこでキリストは、この御手を掴みなさいと呼びかけ、それに応答する者は、すなわちキリストを信じる者は救われ、「死」から「いのち」に移されました。このことから、キリストにある思いは、「罪にはあわれみ」であることが分かります。どこまでも人を「良き者」として扱い、人を裁く思いなど毛頭ないことが分かります。そこにあるのは「あわれみ」だけであり、「愛」しかありません。それでキリストは、ご自分を十字架に架けてののした人に対しても、次のように祈られました。

「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」
(ルカ 23:34)

こうしたキリストの十字架にこそ、三位一体の神の思いが集約されています。それは、人を真剣に愛し、人を何としても助け救いたいという思いです。そこには「愛」しかありません。「あわれみ」しかありません。これを眼鏡にして聖書を読まない限り、聖書の意味を読み違えてしまうのです。

ですが、私たちは人の経験によって手にした眼鏡で、人を知り、神を知ろうとしてしまいます。人間的な標準となった、「罪には罰」という眼鏡でキリストを知ろうとしてしまいます。そのせいで、例えば、創世記 6:5-6 は誤った意味に訳されてしまい「【主】は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。【主】は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた」となりました。ここの本当の意味は、「神は、地上に罪（悪）が増大し、彼らの心が来る日も来る日も、苦しむのをご覧になった。それで神は、地上に人を造ったので思いをめぐらし、考え抜いた」です。こうした訳になってしまうのは、人間的な標準で聖書を読むからです。それゆえ聖書は、人間的な標準でキリストを知ろうとするなど警告します。

「ですから、私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。」
(Ⅱコリント 5:16)

このように、聖書を読むときの基本は、キリストの十字架を眼鏡にして読むことです。そうしなければ、いつも神の福音には覆いが掛かってしまいます。特に、旧約聖書の意味には覆いが掛かってしまいます。

「このため、今日に至るまでモーセの書を読まれるときは、いつでも彼らの心には覆いが掛かっています。」(Ⅱコリント 3:15 新共同訳)

この覆いを取り去るには、心をキリスト(主)に向け直すしかありません。キリストの十字架に心に向け、その眼鏡で読むしかないのです。そうすれば覆いは取り去られます。

「しかし、主の方に向き直れば、覆いは取り去られます。」(Ⅱコリント 3:16 新共同訳)

聖書は神の靈感によって書かれたものであり、それは神の思いを人に伝えています。したがって、神の思いの「本音」を知らないままで読むと、意味を取り違えてしまうのです。このことを、分かりやすい日常の出来事で説明してみましよう。例えば、あなたは、親から次のようなメールを受け取ったならどう思うでしょうか。

「私が言ったことをしなかったのか。ならば、私にも覚悟がある」

この文面を読んで、あなたは恐怖を覚えないでしょうか。何をされるか分からないと思い、親を恐れることでしょうか。「罪には罰」という眼鏡で読んでしまうと、親からの罰を恐れることとなります。しかし、ここでの、「**ならば、私にも覚悟がある**」は、子どものことを本当に愛していたので、私が言ったことができないのであれば、何とか助けてあげたいというものでした。そこで親が、次のようなメールを書いたならばどうでしょう。

「私が言ったことをしなかったのか。ならば、私にも覚悟がある」 😊😊😊

この場合だと、恐怖を覚えはしません。厳しい言葉の中に、親が自分を愛し、何か良い方向に自分を導いてくれるという期待を持つことができます。このように、親の書いた文面は同じでも、「スマイルの絵文字」を付け加えさえすれば、親の思いを正しく伝えることができます。つまり、キリストの十字架こそが、この「スマイルの絵文字」なのです。聖書は神からのメールであり、それを読む時は必ず最後に、キリストの十字架がそこに付け加えられていることを忘れてはならないのです。そうすれば、神の福音には覆いが掛かることなく、神の思いを知ることができるようになります。では、実際に例を挙げてみましょう。

■聖書の例

聖書には、次のような御言葉があります。あなたはこの御言葉を読んで何を思い浮かべ、どう思うでしょうか。

「一度光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊にあずかる者となって、神のすばらしいみことばと、来たるべき世の力を味わったうえで、墮落してしまうなら、そういう人たちをもう一度悔い改めに立ち返らせることはできません。彼らは、自分で神の子をもう一度十字架にかけて、さらしものにする者たちだからです。」

(ヘブル6:4-6 新改訳2017)

これを読むと、人はこう思ってしまいます。救われても、悪い行いに身を委ねるような生活をするなら、もう神に立ち返ることはできなくなるのだと。つまり、罪を犯し続けるなら、救いは取り消されてしまうと、思うってしまうのです。そして、神に対し恐れを抱き、神の目に怯えるようになります。そうではないでしょうか。「罪には罰」という眼鏡で読むと、そのようになります。しかし、「罪にはあわれみ」というキリストの十字架の眼鏡で読むなら、そのようにはなりません。

まずキリストは、誰をも裁かれまいと言われました。そして、行いに関係なく、私を信じさえすれば救われると言われました。さらには、キリストの言われる救いとは、「死」から「いのち」に移されることでした。ですから、一旦「いのち」に移された者は、すなわち「神の国」に入れられた者は、もうそこからは出られなくなるので、救いは決して取り消されないことを教えられました。分かりやすく言うと、一万年くらい先に運ばれてしまったら、過去に戻りたくても人はもう戻れないのと同じです。したがって、救われた者は、今後はキリストと共に生きるしかないことを知るしかありません。これが、キリストの十字架に込められた神の思いであり、この十字架の眼鏡で先の御言葉を読むのです。

十字架の眼鏡を掛けると、すぐに気づきます。ここの話は全く以て、あり得ない「仮定」の話をしていると。救われた者が墮落するなど、すなわち神から離れて元の居場所(死の世界)に戻るなどできないのだから、できないことを強調することで、後ろを振り向かず神と共に生きるしかないことを訴えていることが分かります。それでこの御言葉の先には、「そこで、神は約束の相続者たちに、ご計画の変わらないことをさらにはっきり示そうと思い、誓いをもって保証されたのです」(ヘブル6:17)と書かれています。ここでは救われた者を、「約束の相続者たちに」と呼び、その救いの計画は、「変わらないことをさらにはっきり示そうと思い、誓いをもって保証された」とあります。つまり、一旦救われ「約束の相続者」となったなら、もう後戻りはできないのです。

あり得ない逆のことを言うことで、本心を強く印象づけるこうした手法は、日常生活でもよく使われています。例えば、子どもを愛する親が子に、子どもが言うことを聞かない時、

「家から出て行け！」と叫ぶことがあるが、それは、「お前のことを、本当に愛している！」と真剣に叫んでいるのです。ペテロもイエスに、「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから」（ルカ 5:8）と叫んだことがあるが、それは自分を見捨てないでほしいという真剣な叫びです。このヘブル 6:4-6 も、これと同じ手法が使われたのです。逆のことを言うことで、本当の思いを強く印象づける手法が使われています。ただし、それはキリストの十字架が前提となるからであって、それがなければ、この箇所は字義どおりの意味にしかありません。「家から出て行け！」と叫んだ例も、親が子ども愛しているという前提がなければ、それは字義どおりの意味にしかならないのです。まさしく聖書の意味を決定するのは、キリストの十字架という神の「本音」なのです。

このように、キリストの十字架の眼鏡で読まない限り、すなわち人間的な標準「罪には罰」という眼鏡で読む限り、神の福音である神からのメールに、覆いが掛かってしまいます。そこで、もう一つだけ例を挙げると、黙示録にはこういう御言葉があります。

「しかし、おくびょうな者、不信仰な者、忌まわしい者、人を殺す者、みだらな行いをする者、魔術を使う者、偶像を拝む者、すべてうそを言う者、このような者たちに対する報いは、火と硫黄の燃える池である。それが、第二の死である。」

(黙示録 21:8 新共同訳)

罪を犯す者の報いは、「火と硫黄との燃える池」だとあります。俗に言う、「地獄」のことです。神に聞き従わない者には罰があり、その罰は「地獄」だといいます。神はその者を「火と硫黄との燃える池」に投げ込み、そこで苦しむ姿をご覧になるというのです。それも永遠に、です。人はそれを読むと、ただただ怯えてしまいます。神を恐れてしまいます。しかし、そこに描かれている神と、十字架の神とは同一人物なのでしょう。片や容赦なく罪を裁く方であり、片や罪を裁かない方です。同じわけがありません。無論、真実は十字架の神です。ならば、ここでの意味はどういうことになるのでしょうか。

まず黙示録は「黙示」であって、それは幻による比喩であり、何かを訴えています。では、「火と硫黄との燃える池」は何を訴えているのでしょうか。それは、人は生まれながらに死んであって、そのままでは滅びるしかないので、わたしの御手に掴まりなさいと訴えているのです。そうしないと滅びるしかなく、それはとても怖いことなのだから、早くこの手に掴まりなさいと、神の最大限の訴えをしています。キリストの十字架の眼鏡で読むなら、まことに真に迫った神の愛を、黙示録からは読み取ることができるのです。

聖書の読み方の基本を説明してきましたが、聖書はキリストを証しする書です。そのキリストの思いは、人を救うために架かれた十字架に集約されています。それゆえ、キリスト十字架の眼鏡を掛けて聖書を読まない限り、そこに書かれている神意を読み違えてしまいます。